

新施設への移転

昭和五十九年十二月二十三日に引き渡しの終了した、都立埋蔵文化財調査普及施設は、昭和五十七年の用地選定、五十八年の基本設計を経て竣工しました。六十年一月一日、東京都立埋蔵文化財調査センターが、条例設置されたのをうけて、財東京都埋蔵文化財センターも同施設に一月二十日引越しました。現在、遺物の展示、収蔵等準備を進めています。



トピックス

第10回東京都遺跡調査

発表会での成果発表

当センターが行っている発掘調査の成果の一部について発表会で報告します。日時 三月三日(日)九:三〇(場所) 調布市公民館(駅前)発表内容 ①テーマ No.388遺跡の調査発表者 石橋峯幸 ②テーマ No.91遺跡の調査発表者 鶴間正昭 この発表会は武蔵野文化

協会、東京都教育委員会、調布市教育委員会の共催によって行われるもので、他に近隣の八王子市滑坂遺跡や多摩市和田百草遺跡などの調査発表も行われます。入場は自由です。興味をおもちの方はぜひ御参加下さい。二月十四日 国立奈良文化財研究所の森郁夫、佐藤興治両室長、韓国の文化財研究所の尹根一学芸研究士の三氏が当センターを訪れ、新施設および多摩ニュータウンNo.513遺跡の須恵器、瓦などを視察されました。

人の動き

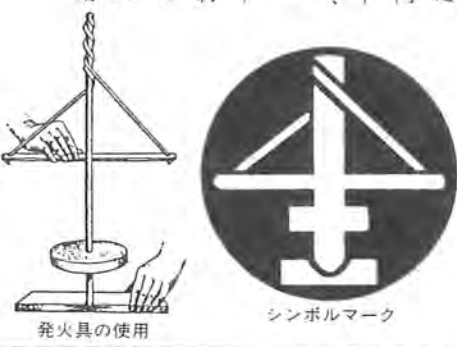
▼昨年十一月三十日付で藤山増二事務局長が勇退され、その後任に十二月一日付で都教育庁から千村洋一朗が就任しました。▼また十一月三十日付で清水洋助総務課長が都立航空工業高等専門学校事務長に転出し、その後任に十二月一日付で五日市青年の家から小平邦人が就任しました。藤山さん、清水さんご苦労さまでした。

(財)東京都埋蔵文化財センターのシンボルマーク決定

昨年の十二月、当センターのシンボルマークを職員から公募したところ、多数の応募がありました。投票、審査の結果、川島雅人調査員の下記図案が採用され、決定しました。

このマークは古代人の貴重な生活用具である発火具(火錐臼)をデザイン化したものです。古代人の英知によって創造された火の使用は文明誕生後の人類発展の歴史の中でも重要な文化要素です。当センターの事業を象徴するにふさわしいテーマです。また、このマークには大地に先人の生活の跡を探り

両翼を拡げて大空にはばたく「飛躍」のイメージも内包されており、当センターの事業の今後の一層の充実、発展を表現するものです。今後、このシンボルマークは当センター発行の印刷物などに表示し、文化財の調査研究、保護普及などの活動のシンボルとして活用することになります。



発火具の使用

シンボルマーク

発行 財団法人 東京都埋蔵文化財センター 〒206 東京都多摩市落合1-14-2 ☎ 0423-73-5296 0423-74-8044 昭和60年2月28日

活力と高度の調査・研究力をもつセンターをめざして

常任理事 高橋初男

昭和六十年の社会の動きは急速な科学技術の進歩により、さらに高度情報化社会が進む一方、人間の心や生きかたが大事にされ、このことが古い時代の文化や歴史への関心をさらに高めていくものと思います。

経済情勢はや、上向き傾向といわれておりますが、国や都の行財政改革が進むなかでセンター運営についても積極的な自主点検の必要があります。

センターは、貴重な文化遺産の保護・活用と住みよい都市づくりとの調和ある発展を目的として設置され、本年は満五年を迎えることになりました。また、本年は優れた都立埋蔵文化財調査普及施設がいよいよ完成し、「都立埋蔵文化財調査センター」とともに「埋文センター」の全面的な活動拠点として使用することになりました。

昭和六十年度のセンター運営は「活力ある組織をもって、高度の調査研究能力をもつ、信頼される埋蔵文化財センターをめざして」次の重点目標の実現に努力してまいりたいと考えます。

- 一、事務局と各遺跡現場とを一体とする活力ある管理運営体制を確立すること。
二、信頼される高度の科学的調査・研究能力を取得すること。
三、発掘作業に伴う労務対策を充実し近代的労使関係を確立すること。
四、安全衛生対策を徹底し、ゼロ災害をめざすこと。
五、将来展望にたったセンターの長期構想を策定すること。
都民の皆様の御期待に添うべく努力したいと考えておりますので、今後ともよろしく願っています。



(財)東京都埋蔵文化財センター報 No.4 昭和60年2月28日



縄文時代前期の土器



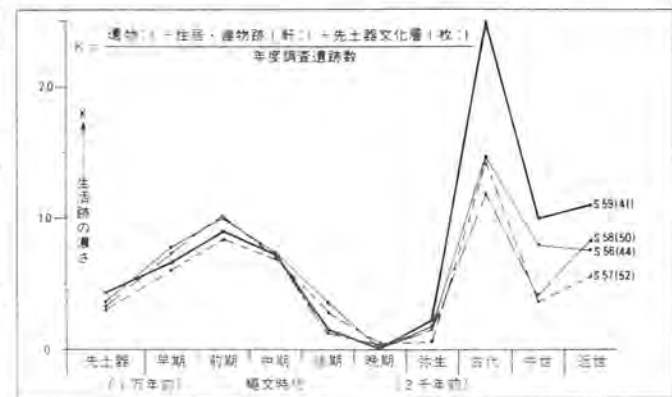
遺跡だより③ 今年度の発掘をふりかえる

今回は昭和59年度に調査された遺跡の大きな様子をとりまとめてみたいと思います。今年度も40ヶ所を超過する遺跡が発掘されました。その中には、すでに本紙で詳しく紹介されたNo.5、No.388、No.271遺跡のように、一万年以上も前の先土器時代から縄文時代・古代・中世・近世（江戸時代）までの大量の遺構と遺物が発見されたところもあります。一方、逆に縄文時代のある限られた時期だけの活動の跡をほんの少ししか残していないような遺跡もあるわけですが、たとえば、No.377遺跡では、山頂部分も含む広い面積が、いいいに調査されました。

が、住居跡は一つも発見されず、縄文時代に獲物をとるために掘ったと考えられる陥し穴状の「土坑」が69ヶ所も発見され、それ以降の時代の人々の生活の跡はほとんどありませんでした。このように、多摩丘陵という一つの地域内の遺跡群を調査しても、見つかるものは、時代の点でも、質や量の点でも実に様々なわけですが、今年度の発掘成果の中で、前記3遺跡以外に注目すべきものが出土した遺跡についてふれておきます。

これまで、この地域では弥生時代のものは、ほとんど発見されていませんでしたが、今年度はNo.461遺跡の谷中で弥生時代の土器や石鏃がまとまって見つかり、さらにその近くのNo.91遺跡では、この時期の珍しい形の石鏃、そしてNo.421遺跡でも約20点の土器片と、発見が相次ぎ、弥生時代の人々もこの多摩丘陵に少しは足を踏み入れていたという証拠が増えつつあります。その他、何回かに分けて調査されているNo.450遺跡では平安時代の住居跡が20以上も発見され、中世の鍛冶工房の跡などと共にこの地域の古い村の姿を知るための貴重な資料となっています。さて、最後に今年度の調査の結果を過去3年のもの

と比較しながら、時期別にまとめてみましょう。下図は先土器時代から、近世までを、大きく10の時期に区分し、それぞれの「生活跡の濃さ」を指数にして表わしたものです。遺跡で発見される生活跡の濃さを数字で表わすなどというのは、難しいことで、とても乱暴なことかもしれませんが、試みに行ったところ、この地域の遺跡に特有な、時期別の変化がよく現われているように思います。つまり、先土器時代から生活の跡が次第に濃くなり縄文前期で一つのピークに達しています。そして、中期以降はほとんど下降し、晩期の生活跡はほとんど消え去ってしまおうといことがわかります。時代が新しい程、遺跡に残されて発見される生活痕跡の率は高いはずですので、これはとても重要な事実を示しているように思います。



No.461遺跡では、縄文時代の住居跡が7つと縄文早期から中期までの土器片が五千点も出土し、その中でも特に前期の遺物が大量に得られました。右上図はその一つです。No.9遺跡では、縄文時代の一番古い頃（約一万年前）に使われた局部磨製石斧という刃の部分だけを磨いて作った特徴のある形の石斧が発見されて注目をあつめました（下図）。



と比較しながら、時期別にまとめてみましょう。下図は先土器時代から、近世までを、大きく10の時期に区分し、それぞれの「生活跡の濃さ」を指数にして表わしたものです。遺跡で発見される生活跡の濃さを数字で表わすなどというのは、難しいことで、とても乱暴なことかもしれませんが、試みに行ったところ、この地域の遺跡に特有な、時期別の変化がよく現われているように思います。つまり、先土器時代から生活の跡が次第に濃くなり縄文前期で一つのピークに達しています。そして、中期以降はほとんど下降し、晩期の生活跡はほとんど消え去ってしまおうといことがわかります。時代が新しい程、遺跡に残されて発見される生活痕跡の率は高いはずですので、これはとても重要な事実を示しているように思います。

また、弥生時代のものも依然として少なく、古代（ほとんどが平安時代）になり、再び生活の跡がぐんと濃くなるのです。そうした傾向は毎年非常によく似ていますが、ことに59年度の調査では、先に述べたように弥生時代と平安時代の出土物が例年よりも多かったことをよく表わしているといえます。（阿部）

文化財講座<3> 遺跡の分布

ここに遺跡があることがどうしてわかったのですか。これは遺跡を訪ねてきた人達がよく口にする言葉である。門外漢の人には地下に埋れている遺跡がどうしてわかるのか大変不思議に思われるらしい。

遺跡がどこにあるかを確かめる調査は一般に分布調査と呼ばれる。遺物の表面採集や試掘などの方法がとられる。考古学のフィールドワークの中では最も基本となる作業であるが、発掘調査にくらべて華々しさがな

いたためか、このような調査が行われていることは意外と知られていないようである。遺跡の数が年々増加するのにも、各地でこのような地道な調査が営々と続けられているからであり、現在、

と、その分布の状態がよくわかる。かつての海岸地帯と考えられるところには、内陸の奥地にまで貝塚が分布するし、交易路があったと考えられるルートには、点々と連なる遺跡の分布がみられるなど、遺跡の分布は、その地域がそれぞれの



時代によつて異なる生活の舞台になつてきたかによつて異なるが、このような枠を超えて共通するものが、水との強い結びつきである。具体的に東京都内の遺跡をみてみると、その分布の状態は、関東山地・多摩丘陵・武蔵野台地・荒川低地・伊豆諸島というように、それぞれ立地する地域の違いによつて異なるが、対照的なのが水系の発達に大きな差のみられる多摩丘陵と武蔵野台地の在り方である。多摩丘陵では、開析が進んで水系が樹枝状に発達しているため、遺跡は丘陵内にくまなく分布しているのに対して、武蔵野台地では、開析がほとんど進んでいないため、遺跡は河川沿いに帯状に分布しているのみで、台地の内部には及んでいない。武蔵野の新田開発を引き合いに出すまでもなく、人が生活する上で水がいかに重要であったかが遺跡の分布にもよく現れている。（可児）

多摩の歴史を訪ねて③

永林寺

金峯山道俊院心月閣と称する本寺は、開基由緒書によると天文七年（一五三八）大石定久（法名が道俊）の勸進を受け、彼の甥である長純によつて開かれたとある。大石氏が歴史上にデビューするのは円覚寺文書定安三年の能重であるが、十五世紀前半からは鎌倉公方家の管領であった上杉家の守護代として成長した。定久の祖父である頭重は大田道灌と同世代に生きた人物で高月城を、また父の定重は滝山城を築城したとある。



北条氏康は、天文十五年に氏照を定久の養子一由井源三として迎えている。その氏照は弱冠十五才で、背後には強力な力があつた様である。それは永正七年北条早雲の関東制覇を停止させた父定重の動向や、北条氏綱の鶴岡八幡宮勧進に対しての非協力体制などにみられるように、大石氏と北条氏との関係は決して穏やかでなかったのである。大石氏系図によればその後、数年で定久は戸倉に蟄居、定久の子定伸は総州関宿城へ、また直久は豆州獅子浜へと動き、天正十八年の秀吉の小田原攻めで霧散する運命を辿る。中世から近世にかけて日本国中をまき込んだ激動の中に永林寺を映しむながら、由木名物の酒饅を頼りながら、冬枯れの丘陵を歩いた。永林寺へは京王バス多摩センター発八王子駅行で由木小学校前下車。（館野）